

0.3T オープン型 MRI 装置における頭部の臨床 MR-DSA

寺田一志 五味達哉 中寫倫子 國弘敏之 平松慶博
中村敏明* 原田桐靖* 角田和代* 阿部貴之**

東邦大学医学部第2放射線医学教室 *同大学医学部附属大橋病院放射線部 **^(株)日立メディコ技術研究所

近年、血流動態評価を目的とした MR-DSA が提案され検討されているが、主に高磁場機において検討されており、また後処理を必要とする一概に臨床的とは言えない研究が多い。我々は0.3T オープン型 MRI 装置と後処理を必要としない臨床用ソフトを用いて被験

者に何の負担をかける事も無く、造影剤を使用する臨床例の全例にルーチンに MR-DSA を撮像している。臨床例であり厳密な有効性を評価するのは難しいが、臨床レベルでは有効・有用であった症例を多く経験したので供覧する。

3D イメージによる肝前下区域門脈枝の検討

郡司 久 趙 明浩 高山 亘 川島太一
泉 誠 横井健人 竜 崇正

千葉県立佐原病院外科

今回我々は肝臓造影 CT を施行された40症例について門脈枝 P5 の本数及び分岐パターンを MPR 像と3D 構成画像で検討した。研究方法として中肝静脈と右肝静脈に挟まれ、門脈前区域枝分岐部より尾側を S5 とし、同部への門脈枝を P5 とした。ただし、後区域枝より分岐しているものは P5 としなかった。そ

して P5 がどの枝から分岐するかを検討した。結果、P5 の本数は1本から最高5本で平均2.15本であった。また P5 86本の分岐部位は、8a8c 分岐部から44.2%、8a から30.2%、前区域枝から19.8%、8c から5.8%であった。これらはいずれの部位からの分岐も8a8c 分岐部近傍からであった。